

ボランティアグループがつくる和歌山県男女共同参画センターの書評誌

# この本よんだ？

～りいふる BOOK プラス～



## お父さんがキモい理由を説明するね

中山順司 著 泰文堂 2014年 (K:エッセイ・文学)

ちょっと過激なタイトルに魅かれて、本書を手にとりました。読んでみると、中学2年生の思春期の娘を持つ、対話のなかった父親が、娘の一言をきっかけに週1回対談をしてみたというのが内容である。テーマは、恋愛、夢、長所と短所、友情、いじめ、生きる意味…などで本当は考える間があったり、余談に走ったりしているのだろうと思うが、その内容が編集されて一冊の本になっている。対談を続けていくうちにおもしろくなってきたので、「正しい彼氏の見つけ方」の回で母親が登場したり、「家系」の回で祖父が登場して自分

の先祖のことなどを語っている。

この本をよんで、どの父親でも思春期の娘と話せるようになるのかといえ、そうではないと思うが、思春期の子供をもつ母親向けの本はあっても、父親向けの本は少ないので少しは参考になるかなと思う。若い女性も読んでおもしろいのではないかなと思う。(か)



# 保育園義務教育化

古市憲寿 著 小学館 2015年 (F:子育て)

著者の考える「保育園義務教育化」というのは、「0歳から小学校に入るまでの保育園・幼稚園を無料にした上で、義務教育にしまえばいいというアイデア」です。本書ではそのメリット、日本社会における育児を取り巻く問題が分かりやすく説明されています。タイトルから少子化対策や女性の社会進出促進だけが連想されがちですが、それら以外のメリットも書かれていて興味深く読めます。

保育園義務教育化をすることで質の高い乳幼児教育を受けられるので子どものためになり、そんな子どもたちが社会に出れば日本全体の犯罪率が減ったり、失業保険や生活保護受給者が減るので日本社会がよくなる

ことに繋がるという考察などはおもしろいと思いました。

実際に保育園義務教育化するべきかどうかは意見が分かれるかもしれませんが、現在の人々の生き方や価値観に併せて制度は変わっていくべきだという思いは強くなりました。本書の提言の向こう側を我々も一緒に考えていかなければならないと思います。

(A.T.)



# わたしに会うまでの1600キロ

シェリル・ストレイド 著 雨海弘美・矢羽野薫 訳 静山社 2015年 (K:エッセイ・文学)

母の死と離婚、愛する人との別れから、喪失感にさいなまれる作者が、自分自身を取り戻すために、1600キロにおよぶ山道と砂漠を、たった一人で三か月間歩くという、自叙伝です。

立ち上がれないほどの荷物を担ぎ、水のない荒野や雪山を歩み、危険な人や動物を避けるトレイルの過酷さは、スポーツや日本の遍路とは、まるで違います。また、その合間に綴られる作者の生い立ちや自堕落な生活は、現代アメリカ社会の底辺の闇を思わせませす。

文学的素養を持ちながらも、望まない十代の妊娠で、教育を受けられなかった母親を、作者は敬愛しながらも、そのようになるまい

と誓います。人生の運転席に座ったことは一度もなかった。いつも誰かの言いなりだった。誰かの娘か母親か妻でしかなかった。私自身でいたことがない。という、母からの負の連鎖を断ち切る一歩と

してのトレイル。やり遂げた。だから、どんな荒野が広がっていても、人生に身をゆだねられる、という強い書でもあります。

(I.K.)



## オトナも子供も大嫌い

群ようこ 著 筑摩書房 2001年 (K:エッセイ・文学)

「アケミちゃんは変わっている」、幼少のころから近所の人に言われていた主人公。

家でも学校でも、よく観察し、しっかり自分の頭で考え行動するアケミだが、その行動はかなり大胆である。

授業は全部わかるし、テストも満点、登校する理由がないと独断して不登校を決め込んだり、夏休みの宿題、絵日記やアサガオの観察記に価値を認めずまじめに取り組まなかったり等々。

当然、たしなめ、導こうとする母親や先生に、アケミは子供の側の本音をぶつける。そして、言うことをきかぬ子と思われ、時には子供の世界からもはみだしてなおわが道を行くアケミの、主に小学生時代が描かれている。

両親と弟の四人家族で、父親は自営のデザイナー、定収入はなく、貧乏ではないが裕

福でもない家庭だが、ピアノなどの稽古等に通わせてもらったりした。活発で子供らしい理論武装をしたアケミにてこずりながらも、両親が激怒するようなことはなく、基本、あたたかくて、ゆるい空気が流れているような家庭なので、アケミは個性をつぶされることなく、自己の世界を築けたのだろう。あっぱれな子供達人物語である。

この本は、ほとんどセリフで成り立っていて脚本のようだ。内容といい、読みやすさといい実は児童書なのかもしれないと思った。

(大空)

※本書は、昨年夏のりいぶるの図書展示「おすすめ的女性作家」にとりあげられていました。



## 女のいない男たち

村上春樹 著 文藝春秋 2014年 (K:エッセイ・文学)

本書は、『東京奇譚集』以来9年ぶりの短編小説集。雑誌「文藝春秋」に掲載された『ドライブ・マイ・カー』『イエスタデイ』『独立器官』『木野』、文芸誌「MONKEY」に掲載された『シェエラザード』、書下ろしの表題『女のいない男たち』を加えた6編の物語が収められている。

この場面は、あの場面に出てきた同じ場所なのかと、ページを戻してみると「やはり」と



納得し、それぞれの映像が目に浮かぶ状況を作りやすくしてくれている。珍しい名字の登場人物と個性が符合されていたり、同じ名字の聞き手役が重要人物としても登場する。また、随所に、さすが村上春樹氏と思わせてくれる巧みな技が隠されていて、時には考えさせられたり、ぞくっとしたり……。

著者自身にしては珍しく「まえがき」に刊行した経緯と、短編小説の執筆方法も記されている。

ドラマ性のある大人の短編小説集です。ぜひ、読んでみて下さい。

(K)

# うちの子になりなよ -ある漫画家の里親入門-

古泉智浩 著 イーストプレス 2015年 (C:家族・結婚)



本書は「里親日記」と「里親入門」の2部構成となっている。「里親日記」では生後5ヶ月の赤ちゃんを預かってから1歳2ヶ月までの子育て日記が、1編2~4頁程度の文章に4コマ

漫画1本という組み合わせで綴られている。寝返りやつかまり立ちなど、赤ちゃんの成長が詳細に描かれ、一見普通の子育てと変わらない愛情あふれる日記に見えて、「嬉しい気持ちがいままで続くのか半信半疑で、減ってしまうことが心配でならない」といった所に里親ならではの不安な心情が表現されている。

著者が何故里親になったのか、その経緯

がよくわからないままに「里親日記」は終わる。そんな疑問を持ちつつ読み進めると「里親入門」にその解答があった。このあたりが本書に深みを与えている。著者の過去とも複雑に関わっており、ここは是非本書をお読みいただきたい。不妊治療、里親になる決心をしたきっかけ、児童相談所での里親認定の手続きなど、経験談として語られており、解説書のような堅苦しさがなく読みやすい。

4コマ漫画のほか、プロローグ、エピローグに掲載された短編漫画も余韻が残るいい作品なので見逃せない。

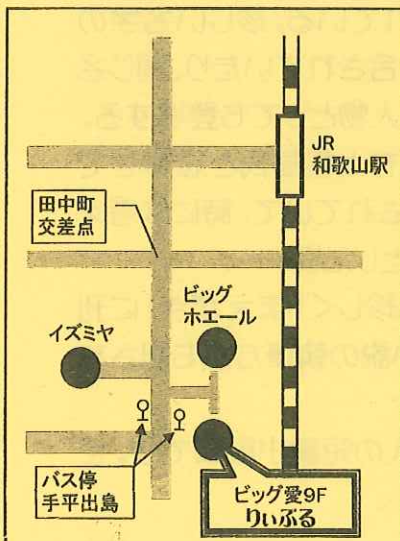
あとがきの最後は次の言葉で締めくくられている。「里親制度は本当に素晴らしい制度です」。

里親に興味をお持ちの方には是非手にとってもらいたい一冊である。

(O.S)

## ※“りいぶる”での分類記号一覧

A:フェミニズム B:労働・法律 C:家族・結婚 D:女性・子どもに対する暴力 E:こころ・癒し F:子育て G:からだ  
H:セクシュアリティ I:女性史 J:自伝・評伝 K:エッセイ・文学 L:高齢社会・福祉 M:男性学 N:資料・雑誌 O:その他  
P:AV資料 Q:コミック R:NPO サポートセンター所蔵図書



この本 よんだ? 第13号 (2017年1月発行)

◇企画・発行 りいぶるぶらす

◇協力 和歌山県男女共同参画センター“りいぶる”

【編集後記】 昨年の春から、わたしたちの「この本よんだ?」にとりあげられている本が、りいぶるの中央テーブルに展示されています。その結果、以前よりも手に取って借りてくださる方が増えているようで嬉しい限りです。大きな図書館に負けない、おもしろくて内容の濃い図書・情報資料室になるといいですね。今年もボランティアを続けていきたいと思っておりますので、応援よろしくお願ひします。

E-mail [libreplus@yahoo.co.jp](mailto:libreplus@yahoo.co.jp)

ボランティアスタッフ募集。メールでお問い合わせください。